Fact Sheet

内田麻理香
――文系と理系の間で『好き』を探る

理系に進学したら、将来は理系の職業に就くしかない……？　そんなことはない。理系に進学しても、いや、理系に進学したからこそ進路の幅は広がる。私は理系卒ではあるが、理系と文系の中間の仕事をしている。

私はいま、社会の中での科学のあり方・関係を考えて、科学の語り部となるサイエンスコミュニケーターとして働いている。サイエンスコミュニケーターとは聞いたことのない言葉だろう。科学と社会の架け橋となるために活動する役割のことを指している。

「生活の中には科学があふれている」を合言葉に、くらしの中の科学を伝えている。具体的には、サイエンスライターとして、科学に関する執筆活動が中心。書籍の執筆の他、新聞やウェブ・雑誌などに連載している。科学実験教室の講師をすることもある。また、テレビやラジオに出て科学をわかりやすく解説する仕事もしている。この他、母校の工学部の広報担当の研究員として、工学部の研究成果を発信する研究機関の広報担当の仕事に携わったこともある。

仕事をするうち、サイエンスコミュニケーションという分野をもっと知りたいと思い、現在は大学院の博士課程に社会人入学し、学生として学業・研究をしているところである。「自分の好きな科学が世の中ではどんな受け取られ方をしているか」を知るために、毎日失敗と試行錯誤の連続だが、発見や驚きだらけで充実している。

幼い頃から自己流の実験をするなど、もともと科学には興味があった。理系進学を決心したきっかけの一つは、中学生の頃にアニメーション映画を見て、スペースコロニーを作りたいと憧れたことだ。得意科目は文系だったが、無謀にも理系に進学を決めた。今振り返ると、驚いてしまう。そして、大学院博士課程まで進んだが、一貫して「理系としても文系としても中途半端」な自分に悩んでいた。研究は好きだったけれど、理系の同級生や先輩を見ていると「ホンモノの研究者」にはなれそうにもない。一方で文系の同級生を見ていると「かなわない」と落ち込んでしまう。モラトリアム進学だったかもしれない。

博士課程進学と同時に結婚したが、家庭の事情により退学して専業主婦に。仕事に就かないままに専業主婦になった自分に悩み、「何かできないか」と考えて、好きな科学と苦手な家事を組み合わせたウェブサイトを立ち上げることにした。その後、出版をすすめられ、その内容をまとめた本を出版、サイエンスライターとして活動を始めた。さらに母校から広報担当者としての誘いを受けて就職。2年半大学で働いたが、より幅を広げた活動をしたいと考え、現在はフリーランスのサイエンスコミュニケーターとして仕事をしている。

（裏面につづく）

Fact Sheet

どんな仕事が向いているかわからないまま20代も超えようとしていたが、思いがけないところから「文系と理系の間」に立ち、「好き」を貫く仕事に出会うことができたと思う。

賢い女性ほど、先のことを考えてしまって「一歩」を踏み出しにくい情報ばかり目に付くのではないだろうか。 理系に進んだら道が狭まるのではないか、出産したら仕事ができなくなるのではないか、など。私は、あまり考えずに次々と行動を起こしてしまった。その結果、予想もしなかった大変なことは多く待ちかまえていたが、それを上回るご褒美も待っていた。 人間の頭で考えられることはたかがしれている。 自分の心に耳を傾けて「好き」という感情に素直になると、楽しい未来が待っている。

略歴

年代	
1974年	千葉県船橋市に生まれる
1993年	渋谷教育学園幕張高等学校卒業
1997年	東京大学工学部応用化学科卒業
1999年	東京大学大学院工学系研究科応用化学専攻修士課程修了
1999年	東京大学大学院工学系研究科応用化学専攻博士課程進学 日本学術振興会特別研究員(DC1) 同大学院博士課程中途退学
2005年	処女作『カソウケン（家庭科学総合研究所）へようこそ』（講談社）を出版 サイエンスライターとして活動を開始
2007年	東京大学大学院工学系研究科・工学部広報室特任教員
2009年	東京大学大学院工学系研究科・工学部広報室特任研究員 東京大学大学院情報学環・学際情報学府博士課程在籍
2010年	東京大学を退職　フリーランスのサイエンスコミュニケーター

（サイエンスコミュニケーター　内田麻理香）